

先土器時代遺物集中個所の広がりについて

川島利道

1. はじめに

先土器時代の遺物としては、通常、石器・剥片類、礫群等が全てであり、これらは、多く平面的にまとまりをもって出土し、ブロックとかユニットなどと呼ばれている。

ここでは、この遺物集中個所をブロックと呼び、その平面的及び垂直的な広がりについて少し検討してみたいと思う。

2. ブロックの平面的広がり

ブロックの平面的な広がりについて、かつて野川遺跡では、直径4～7mに入るものが多いとされ(註1)、また、月見野遺跡群では、数mの径を越えない狭い地点に集中しているとされた(註2)。これらは、現在においても概ね承認されることと思われるが、ここでは、もう少し多くの遺跡を調べて確認したいと思う。

図1は、千葉県内23遺跡220ブロックについてその平面的な広がりを調べたものであるが(註3)、4mが一番多く、2～6mに全体の84%が集中しており、平均は4.6mである。また、8m以下をみると実に全体の95%が入ってしまう。

このことは、その集中度から察するに、県内における資料をもっと加えてみても大きく異なることはないのではないと思われる。そして、さきの野川遺跡、月見野遺跡群等の報告ともほぼ一致することから、あるいは、このあたりの数字が南関

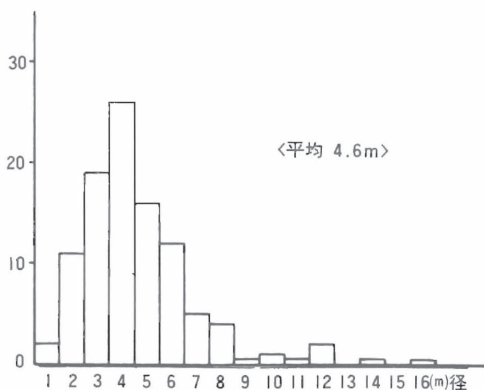


図1 ブロックの平面的広がり

東という広域においてもだいたい当てはまることを示しているのかもしれない。

ところで、近年先土器時代の遺物は千葉県内各所から出土し、特に北総台地においては、遺跡から、全く出土しない方が珍しいぐらいである。しかし、以前のようにローム層に到達すると調査が終了となる発掘が幅を利かせていた時代は過ぎ去りかけていると思われるが、上層において多量の遺構、遺物が出土した場合、調査が上層のみで打ち切られることもまだまだ多いようである。

現在、先土器時代の調査は、確認調査で出土した地点を拡張するという方法が普通であり、そこにおいては、確認調査段階、つまり確認調査の方法如何が遺跡の性格、価値を左右する感すらうかがえる。

図2は、現在行なわれている主な確認調査の方法とともに、平均4.6mの広がりをもつブロックが、そこにおいてどのように確認されるものなのかを示したものである。

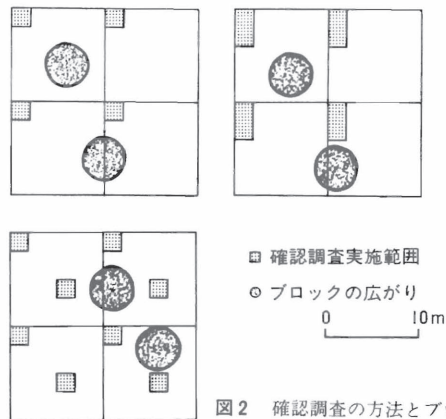


図2 確認調査の方法とブロック

この図からも明らかなように、現状での確認調査の方法は、偶然の出土に期待するもので、全ブロックの確認には程遠いものである。このことは、本格的研究が開始されてから日も浅く、その社会の解明も困難な先土器時代が、時間と費用がかかることもあって、依然として日本史において軽視されていることをよく表わしているといえよう。

確認調査においては、本調査で全ブロックの発掘が出来るように行なわれるのが理想的であるが、

現状の限られた期間と費用の中では、かなり困難なことであると考えられる。しかし、それに少しでも近づく努力はすべきであって、それには少々粗くてもよいからスコップ、エンピ等で、より早く、より密度濃く（細かく）発掘することではないだろうか（註4）。また、報告書においては、どれだけ掘った結果の成果なのかを明示することは当然である。

3. ブロックの垂直的広がり

ブロック内の遺物が垂直的あるいは層位的にかなりの上下幅をもって出土することはよく指摘されることで、漸増→極大→急激な減少が一般的な傾向のため、月見野遺跡群ではビーナス曲線と呼ばれた程である。

図3は、さきの23遺跡から垂直分布の不明な1遺跡を除いた22遺跡211ブロックについて調べたものであるが（註5）、40cmが一番多く、20～60cmに集中している他、70・80cmのものもかなりあり、平均は44cmである。この垂直的広がりには、その遺跡付近の土層と強く関連するものであって、一概に他地域に広げて考えるのは危険であるが、少なくとも下総台地ではほぼこのぐらいと考えてよいであろう。

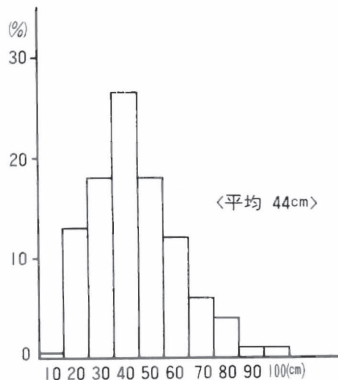


図3 ブロックの垂直的広がり

図4は、相模野（註6）、武蔵野（註7）、下総（註8）各台地の主な遺跡の土層柱状図による立川ローム層の対比を示したものであるが、下総台地では、ローム層が薄く、黒色帯が明瞭でなくなる様子がよくわかる。それに対して、III層つまりソフトローム層とAT（始良丹沢パミス）はほとんど変化しないか逆に厚く感じられるくらいである。

ソフトローム層については、他のローム層とは異なる成因が考えられるが、下総台地の場合、特に、直下のハードローム層であるIV層が武蔵野台地と比べて非常に少ないことから、このIV層のソフト化が考えられるであろう。このことは、武蔵野台地のIV層下部付近に多い横広の剥片を素材としたいわゆる切出形のナイフ形石器が、下総台地ではIII層の下部からソフトローム層とハードローム層の境のクラック付近にかけて多く検出されることから首肯出来るものと思われる。

また、ATが目立つ傾向については、下総台地において、近くの富士、箱根等の火山灰の降下が相模野、武蔵野両台地より少ないところに、両台地とほぼ同量のATが降下したためと考えることが出来る。

このことは、かりに武蔵野台地と比べたとき、ローム層の内容が基本的には同じでも、層厚が薄いため、そこに包含される石器群の取扱いにはより注意が必要であるといえる。

安易に自然層の分層名を冠して文化層としたり、第何層出土というのではなく、少しでも生活面を意識したブロックの把握が求められているのである。たとえば、ブロックの平均上下幅44cmを考慮するとき、確認調査などで出土した1点の遺物が、

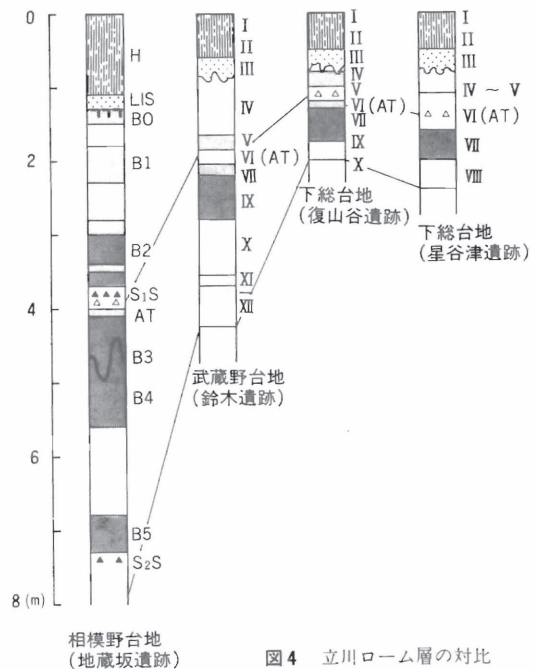


図4 立川ローム層の対比

ブロックの最上部の場合と最下部の場合とでは80cm以上の開きが考えられ、そのときの出土層位だけの認識では、掘削機械を多用する昨今の本調査において、ブロック上半が掘削機械により飛ばされる危険も起こり得る。

4. まとめ

遺棄あるいは廃棄されてローム層中に包含された遺物については、周水河現象であるインボリューション(註9)とか霜柱等による土中での動きがある訳であり、原位置からの垂直的な移動、特に上方へのそれが大きいことはビーナス曲線などからも指摘出来る。ただ、平面的な移動については、その検証が困難であるため知り得ないが、礫群のまとまり具合などからはあまり大きな移動は感じられない。

このようにみれば、先土器時代の遺物は、それ以後のものとは比べてそれが遺棄あるいは廃棄されてからの移動が相対的に大きいといえるかもしれない。それは、また、本来遺存していたであろう多くの遺物の中で、腐蝕消滅をまぬがれて今日まで残った数少ないもののうち、調査された範囲内において出土したものであるという限られた資料である。

この限られた資料の中では、遺物のまとまりに注目し、それを分析していくという方法が最も基本とならざるを得ない。ただ、通常ブロックの扱え方が「先験的、視覚的」(註10)あるいは「感性的」(註11)なものであることを認識し、そこにおいて把握されたブロックを整理・分析の過程で再検討することが重要である。

(4班・空港事務所)

註

- 1) 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男
「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』
10-4 昭46
- 2) 月見野遺跡群調査団『概報月見野遺跡群』
昭44
- 3) 下記の23遺跡の報告書において、遺物の集中が認められる220ブロックについてその平面的広がりを調べたものであるが、ブロックの扱え方は必ずしも報告者と一致しない面もある。
①鈴木道之助「木苜峠遺跡」『千葉ニュータウ

- ン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭49
- ②鈴木道之助「別所大山遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭49
- ③高木博彦・西山太郎「石道谷津遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭49
- ④中山吉秀・古内茂「高根北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』昭51
- ⑤鈴木道之助・西山太郎「雨古瀬遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』昭51
- ⑥古内茂「向原北遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』昭51
- ⑦鈴木定明他「白井第1遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』昭53
- ⑧鈴木定明他「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』昭53
- ⑧b 田村隆他「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』昭57
- ⑨鈴木定明他「館林遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』昭57
- ⑩鈴木定明他「水砂遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』昭57
- ⑪鈴木定明他「花前II-1遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』昭57
- ⑫古内茂他「No.5遺跡」『木の根』昭56
- ⑬野口行雄他「No.6遺跡」『木の根』昭56
- ⑭郷田良一他『千葉東南部ニュータウン10-小金沢貝塚-』昭57
- ⑮関口達彦『千葉東南部ニュータウン11-六通金山遺跡-』昭56
- ⑯瀬戸久夫他「奈木台第5遺跡」『千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡』昭54
- ⑰高橋博文他「藤沢遺跡」『千葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡』昭54
- ⑱大原正義他『佐倉市星谷津遺跡』昭53
- ⑲小林清隆『成田市三里塚馬場遺跡』昭57
- ⑳古内茂・矢戸三男『柏市鴻ノ巣遺跡』昭49
- ㉑天野努他「村上込の内遺跡」『八千代市村上遺跡群』昭50
- ㉒豊田佳伸他「野田裏高田道北側」『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』昭51
- ㉓斉木勝「法蓮寺山遺跡」『小金線-小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭48
- 4) これは基本的にということで、多量の遺物が出土した場合は、移植ゴテ・竹ベラ等で掘るこ

- とは言うまでもない。
- 5) 小金沢貝塚をはじめ、その他の遺跡においても全ブロックの垂直分布図が必ずしも明示されていないため、平面的広がりの場合よりも資料数は9ブロック少なくなった。
- 6) 相模考古学研究会「地藏坂遺跡発掘調査報告書」『綾瀬町文化財調査報告2』昭49
- 7) 鈴木遺跡調査団『鈴木遺跡I』昭53

- 8) 前掲(3)の⑧bと⑩
- 9) 化石周氷河現象といわれるもので、氷河地域に隣接する周氷河地域では、寒冷な気候のもとにはげしい凍結・融解によって土壌の攪乱が生じるとされている。
- 10) 矢島国雄「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての子察」『考古学研究』23-4 昭52
- 11) 前掲(3)の⑧b

「印手式」予察

—— 型式としての印手式へ ——

加藤修司

1. はじめに

「印手式」すなわち「印旛、手賀沼系式」土器(註1)は名称からすれば明らかに「型式」名である。とすれば編年観や分布の内容、地域性及びその発生の要因等について充分把握されなければならない。また土器の機能、用途といった第一義的な検討も必要である。我々が印手式を設定し、それを確立しようとするならばこうした土器研究上の基礎理念(註2)をふまえた上でなければならない。本稿では弥生式土器研究の基礎と現状をふまえながら印手式の問題点を提示し、今後の研究の方向性について考えたい。なお、「予察」であるため具体的な土器の分類、編年等は行わず、挿図も多くは掲載していない点は御容赦願いたい。

2. 弥生式土器研究の基礎と印手式

1) 「様式」、「型式」

チャイルドは土器研究には「機能的、編年的、分布的」3基準が必要であるとしている(註3)。しかし現在重要視され、かつ活発に研究されているのは後2者のようであり(註4)、事実我県の弥生式土器研究、否他の土器についても言えることである。特に編年的研究では型式学的研究に基づき「様式」、「型式」の細分が各地で進んでいる。土器は日常什器としての性格とともにその生産と使用において時間、空間的(以下時空的と略す)に限定される性格を有し、それを社会、文化的要因の中で客観的、理論的に裏づけようとするものが「様式」であり「型式」である。

「様式」は言うまでもなく小林行雄氏が『弥生

式土器聚成図録』(註5)の中で生起せしめたものであり、「斉一性概念であり、同時に個性原理である」とされている(註6)。具体的には個々の土器のもつ外的表現(製作技法、形状等)の分析、機能、用途の追究を経て、結果どのような製作技法の土器がどのような器種として組成されているかがその様式の個性となる一方で、それが斉一的に広がる時空的事象を捉えようとするものである。

一方「型式」は様式と同じような概念(註7)で故山内清男氏以降の縄文式土器研究において主に使用されていることは周知のとおりである。特に東日本では縄文式土器に限らず「型式」が定着しているようであり「印手式」も例外でない。そうした意味で現在の弥生式土器研究は畿内と関東などでは用語上の混乱を引き起こしていると言える。ところが厳密に言えば「型式」と言う言葉は様式論の中でその属性、構造要素として使われているようであるし、また杉原庄介氏の「様相論」(註8)や小林達雄氏のいわゆる「範型理論」(註9)においても独自の意味をもつものとして用いられている。かかる状況では「型式」が「様式」との単なる用語上の差異にとどまらず、質的に多様化してしまっている感はぬぐえない。本稿ではこうした問題には直接言及できないが、印手式については「様式」、「型式」の共通基礎である「製作技法」と「器種」について着目し、その内容や系統的な変遷を今一度把握することが必要と思われる。それが本稿で言う「型式」としての印手式を時空的に確立するための第一歩なのである。

2) 時間の把握